
僕らはねじれの位置にいた

小宮つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らはねじれの位置にいた

【Nコード】

N7778A

【作者名】

小宮つばさ

【あらすじ】

「歩くイカ」知らない？」突如、道で出会った『いくみ』という少女が『正人』に問いかけた言葉。その言葉から、正人の日常が少しずつ変わっていく。

白い少女

くっそ……

なんでこの俺がガキの世話なんかしなきゃなんねーんだよ。

冗談じゃねえ。

冗談じゃねえよ。

なんでこんな…

分けわかんねガキの世話しなきゃなんねえんだよ。

ふざけんな。

朝、俺が一番嫌いなもの。

希望ある一日の始まりとか、んな馬鹿げたこと言ってる奴らもいるが、俺にとっては希望もなにもなし…

無意味な一日の始まり。

窓の外から聞こえる、雀の声。

心落ち着かせるはずのその声も、俺にとっては不快なだけだった。
「うぜえ…」

文句を言っても、雀の声は鳴り止まない。
いっそ石でもぶつけてやろうか。

しばらくして時計を見ると、短い針が十二の字をこえていた。
何時間も、俺は死んだように天井を見ていただけだったようだ。
カレンダーを見れば、月曜日と水曜日にだけ赤丸がついている。
今月四個目の赤丸。十三日の水曜日。
それは今日の日付。

「さあって…買いに行くか…」

月曜日と水曜日には俺が愛読している雑誌が発売される。
それを昼ごろに買いに行くのが俺の楽しみ。
それだけが、俺の楽しみ。

俺は玄関においてある財布を取って、うつとうしい日差しの下へ
出て行った。

外に出れば雑音がうるさい。

子供の泣き声。

…黙らせる。

車のクラクション。

…何回も鳴らしてんじゃねえよ。

チンピラ同士の喧嘩。

…あの世でやれ。

本当にウザイ。

世界に神がいるのなら、なぜこんな低脳なやつらを作ったんだ。
他人を傷つけることしか知らねえ。こんな莫迦な連中を。

一番近いコンビニに行くだけで不快感マックス。

まあいいや。

さっさと買って、家帰って読もう。

コンビニの自動ドアが開くとそれを知らせる音が響く。
さっさと目的のモンを掴んでレジに置く。

この時間は客が少ないからレジは大概開いている。

「二百三十円になります」

レジの若い女は少し不思議そうな顔で俺から小銭を受け取った。
わかってるよ。何が言いたいかは。

再びうつとうしい日差しの下へ出る。

長い赤信号。

ぼへーつとあちら側を見ていたら、気になる子供がいた。

真っ白なワンピースを着た、ツインテールの女の子。

風が吹くと肩を越した髪が少し揺れる。

あっちもこっちを見ているように見えた。

…気のせいに決まってる。

青信号。

ここの青信号は短いから皆大急ぎで渡る。

早歩き程度で全て渡れるから特に急がなくてもいいのに…

そっぴや、日本人はせっかちだってなんかやってたな。

例えばエスカレーターでわざわざ走るとか…

くだらないことを考えていると、さっきの女の子とすれ違った。

すれ違って、お互いの間がメートルも開かないうちに女の子は

振り返って俺の後ろについてきた。

……………なんだよコイツ。

近づくな。

ガキは嫌いなんだよ。

一発怒鳴ればいいか？

いや、いつまでもついてくるはずねえから…

うん。ほつとこう。

無視しとこう。

引き離すためにわざと早歩きで進むと、女の子は駆け足で追ってくる。

俺の隣へ並ぶと、駆け足のままで話しかけてきた。

「ねえ、お兄ちゃん」

話しかけんな。

「ねえ」

うぜえよ。

「お兄ちゃん」

蹴飛ばしてやるのか？

「お兄ちゃん……」

その後には予想だにもしない言葉が待っていた。

「”歩くイカ”知らない？」

「………は？」

思わず足が止まった。

歩くイカ？

何言ってるんだこいつ。

「”歩くイカ”……知らない？」

知らないも何も、無いだろ……そんなもん。

「”歩くイカ”……？？」

「うん。”歩くイカ”」

女の子はにっこりと笑った。

………それが、俺の、最悪な日々の始まり。

茶色の飲み物

「歩くイカ”探してるの。知らない?”

意味不明の言葉をはいて、女の子はいつまでもついてくる。

ついに家までついてきてしまった。

「お兄ちゃん」

「つるせえな!!」

顔も見ずに俺は怒鳴った。

静かになったので見てみれば、何事も無いようにキョトンとこちらを見上げている。

「ねえ…」

……知的障害者か？

とにかく放っておこう。

関わるとうるくなことが無い。

『最低…』

ふとよみがえる自分自身の言葉。

『最低だよ。他人の事なんか、やっぱり関係ないんだ』

……ああ、そうだよ。

”あいつら”と、何にもかわんねえよ。

省みれば、奇麗事ばかりぬかしてたんだな、俺は。

俺は扉を勢いよく開け、乱暴に閉めた。

アイツが入ってこれる隙なんてものは無い。

しばらく時間がたてばどっか行く。
放っておけ…少しばかりでかい猫だとも思えばいい。
扇風機を回し、俺は買ったばかりの雑誌のページをめくった。

やる事が無くて、いつの間にか眠っていて、テレビの音で目を覚ました。

< 次のニュースです。滋賀県大津市の連続放火事件… >
毎日の夜七時に放送しているニュース番組。

五時間は…寝たのか？

寝心地は決してよくないソファのために、体中が痛い。

姉貴が帰ってきてる。

「……姉貴？」

「あ、起きた」

姉貴とは違う、でも聞いたことがある声。

飛び起きて向かいのソファを見れば…アイツがいた。

「お”そ”よう！お兄ちゃん」

「おま……なんで……」

「玄関の前で座ってたのよ」

夕飯の支度を一通り終えた姉貴が麦茶を入れたコップを三つ持ってきた。

「聞いてみたら『お兄ちゃんについてきた』だって」

ありがと、と小さな声で女の子はコップを受け取る。

本当においしそうに麦茶を飲んで、姉貴に「おいしい」という。

「ちゃっちゃんと帰せよ。そんな得体の知れないガキ」

本当に、さっさと帰れ。

図々しく人の家にあがりやがって…

「それがさ…家を聞いても『無い』っていつのよ」

姉貴の言葉に合わせて「うんうん」と女の子はうなずく。

なにが「うんうん」なんだよこのガキ。

「それじゃあ警察にでも連絡して……」

「したわよ」

次の言葉が思い浮かばない。

姉貴が軽いため息をついて言う。

「それでね、身元が分かるまで…ウチで預かることになったから」

「は！？何でだよ！？」

「仕方ないでしょ！？警察で預かるわけにはいかないって、そう言われたの！」

俺と姉貴が口論をしている最中も、女の子はポカーンと見ているだけ。

さすがに我慢の限界。

「おいガキ！」

「なに？」

「ここにいられると迷惑なんだよ！家に帰れ！」

「”歩くイカ”を見つけるまで帰らない！」

「はああ！？ふざけんなよ！」

「正人！いい加減にしなさい！」

まだ五、六歳の女の子よ！」

姉貴に一喝されて黙り込む。

「とりあえず…アンタが拾ってきたんだから、あんたが面倒みなさい」

ご飯は作るけどね、と姉貴は付け加えてキッチンに戻った。

居間に残されたのは、俺とこのアマガキと、飲み乾したコップ一個と、全く口がつけられていないコップが二個。

「まさにとっていうんだね。よろしくね」

につこりと笑って女の子は言った。

「あたし、『いくみ』」

『いくみ』は俺のほうへ手を差し出してきたが、俺はそれをあつさり無視した。

なんで、俺が…？

自分のことで、精一杯なのに。

黒色の最悪な朝

「まさとー！朝ー！」

…こいつ。

いくみが来てから俺は毎朝六時に起こされる。

その所為で朝から見たくもない両親の顔を拝まなければいけない。

「まさと起きたよ。お姉ちゃん」

俺を起こしたことを得意げに姉貴に報告する。

「よしよし。大変良くできました！」

姉貴が満面の笑みで頭なんか撫でるから、コイツは余計に調子に乗る。

朝からイライラしながら、食卓につく。

座って、顔を少し上げれば親父の顔。

アイツ”母親”。”母さん”なんて呼んでいたのはかなり昔

は仕事の為にもうでて行つたみたいだった。

親父のむっとした様子が、顔を見なくても分かる。

「正人」

「……………」

「正人！」

うるせえ…わざわざ怒鳴んな。

「返事をしなさい」

やだね。

何でお前なんかの命令を聞かなけりやなんねーんだよ。

「どうしてお前は…！」

次にくる言葉なんて限られている。

親父が口を開く前に、姉貴が先手を打つ。

「父さん！会社遅れるよ！」

その言葉で親父は勢いよく立ち上がり、乱暴な足音を立てて出て

行った。

いくみはその様子をただ見ていただけで、驚く様子も無かった。

「全く…小さな女の子の目の前で何やってんのよ。あのバカ親父…」
姉貴が毒づく。

そして腰を折っていくみと目線を合わせる。

「ごめんね。怖かった？」

いくみは首を振る。

「そう…いい子いい子！」

がしがしと頭を撫でられると、いくみは本当に嬉しそうな顔をする。

「いくみちゃん。お姉ちゃん、正人とお話あるから、正人の部屋へ行ってもらえる？」

その言葉を聞きながら味噌汁や白米を口の中に放り込む。

「うん！わかった！」

屈託の無い笑顔で答えると、いくみは階段を軽快に上って行った。
足音が真上に來たのを確認して姉貴はため息をつく。

「正人…あんたもあんたよ」

…お説教かよ。

「あんたの気持ちはわかる。

” あんなこと ” があつたら、私だって…」

「わかってんなら、わざわざ言うなよ」

「でもね、過去のことをいつまでも気にしてたらどうにもならないでしょ？」

このままで、あんた…」

「……………」

「…高校どうするのよ…」

またこの話か…

もうほっといてくれ。

「行く気…ない」

「私は、学歴なんか…そんなに気にすることじゃないと思ってる。

……でもね、世間は甘くない……

中卒で雇ってくれるようなところなんて、限られているし……それに……」

「……」

「それに、あんたも男でしょ？」

結婚する際、男の方が学歴のことか、とやかく言われやすいのよ」

そんなの、どうでもいい。

めんどくさい。

生きていることすら、めんどくさい。

『お前なんか、十円の価値も無いんだよ！』

ああ、そうだな……

十円の価値も無い……

黄色い教科書

今日は特にやることは無い。

仕方が無いから今週買った雑誌をくり返しくり返し読んでいた。

「まさと」

いくみが話しかけてくる。

面倒くさいから無視する。

「…まさと」

うるさい。

「……………」

しばらくするといくみは諦めて俺の勉強机に向かった。

ずっと使われていない勉強机。

引き出しには一つ一つ鍵がついているが、必要が無いからかけていない。

いくみは並べられている教科書に興味を持ち、背表紙を人差し指でなぞっていった。

ぴくり、といくみの指が止まる。

指が止まったのは、

「ねえ、まさと。これ読んでいい？」

「…英語？」

中学二年の英語の教科書。

五歳児が読めるはず無い…が。

まあ、どうでもいい。

「ああ…」

「へへっ」

嬉しそうにいくみは教科書を広げる。

紙面に並べれた異国の文字が面白く見えるのだろうか。

とりあえず、これで静かになるのなら、文句は無い。

俺はいくみへの視線を雑誌に戻した。

ぱらぱらと、ページをめくる音だけが聞こえる。

「ねえ、まさと」

「ん？」

やば…

思わず返事をしてしまった…

「韓国では、食べてる時にお椀持ち上げちゃ駄目なんだね」

教科書をみながらいくみは言った。

おい、ちよつとまで。

なんでそれを今……あ。

ベットからおりていくみの見ている教科書を覗き込む。

<you must not bring the bowl
p to your mouth.>

……こいつ、これ読めんのか？

「ほら、ここ……ユウ マスト ノット ブリング ザ ボウル
アップ トウ ユア マウス…」 お椀をあなたの口まで持ってきて
はなりません”だって」

…読めるんだな。

「へへっ！すごいでしょ！」

驚いている俺に得意そうな顔を見せる。

「ちっちゃい頃から習ってたんだよ。」

教室では一番だったんだ」

ああ…英才教育ってやつか…

お受験組の一人か？

「いい学校は行って、就職する時に楽なようにだって」

こんなちっちゃい頃からそんな風に言われてんのか…

どっちにしろ、こいつにはそこまでしてくれる両親が居るんだ。

さっさと帰れ。

「でも…止めちゃったんだ」

五歳児に似合わないしんみりとした表情でいくみはつぶやいた。

詳しく聞くと、多分面倒くさいことになる。

俺は聞こえないフリをした。

俺がベットにもう一度座り、雑誌を読み始めると、いくみはまた教科書をめくり始めた。

赤い引き出し

時間がゆっくり過ぎる。

家の前を通る中高生がうるさい。

この雑誌は何回読んだのか知れない。

いくみも飽きずにずっと英語の教科書を読んでいる。

…と思っていたが、さすがに飽きて教科書を閉じた。

「ねえ、他の本無い？」

「そこにあんだろ」

本棚を指差す。

本棚を一通り見て、いくみは不満そうな声をあげる。

「ヤダ。」

日本語って面白くない」

…英文が読みたいわけか。

「我慢しろ。いやなら帰れ」

「……………」

いくみはしかたなさそうに英語の教科書を再び開いた。

そしてまたゆっくり時間が過ぎる。

いくみが口を開く。

「ねえ。引き出し見たら駄目？」

「駄目」

「なんで？」

別に俺としてはいいけど…さすがにショックでかいだろ…

「見てもいいけど、自己責任だからな」

「????…じこせきにん？」

「自分で決めろってことだ」

あーもう面倒くさい。

「じゃあ開けるねー…」

左の引き出しを開いて、いくみの身体がすこし跳ねたのがよく分かった。

…やっぱりな…

「なにこれ…？」

「なにって………血」

机の中には血糊がべったり。

血糊のほかには果物ナイフが一つ。

「誰の血？」

「俺の血」

「なんで？」

「切った」

右腕をいくみに見せた。

もう一生残るだろう切り傷の痕を。

「痛くない？」

まるで自分が痛いかのように顔をゆがませる。

痛くない…？

痛くないはずねえだろ？

でも、その痛みが快感なんだよ。

『狂ってる……あんだ、狂ってるわ』

そうだ。

俺は狂っている。

桜色の貝殻

「まさと、暇」

俺だつて暇だ。

「火曜日だよ。どっかいこう？」

”火曜日”に何か意味があるのか？

いくみの文句を、昨日買った雑誌を読みながら聞き流していた。

…今週はどれも展開がつまらない…

「ねえ…」

はやく明日になんねえかな…

明日の雑誌は展開が面白いだろうし。

「ねえ！まさと！」

「うるっさいな！」

「どっかいきたい！」

あー…なんでコイツは怒鳴られても平気なんだよ。かわいくねえ。

「ねえ暇だよ。どっかいこうよ！」

「んじゃあ帰れ！」

「だから、”歩くイカ”を見つけるまで帰らないもん！」

「分けわかんねえこと…！」

「正人！うるさい！」

隣の部屋でレポートを書いていた姉貴が、扉を勢い良く開けて怒鳴る。

「連れて行ってあげなさいよ！どうせ暇でしょ！？」

ぶつぶつ言いながら姉貴は自分の部屋へ戻った。

「ねえ、まさと…」

「…帽子とつてこい」

「はい！」

嬉しそうにいくみは姉貴に帽子を借りに行った。

ああ、俺のお人よし…バカみて…

『他人に優しくできるのって、人間だけなんだよ』
バカ言ってたな、俺…

いくみを連れて出たはいいけど…どこへ行けばいい？
ゲーセンに連れて行くわけには行かない…

遊園地に連れて行く金はない。

コイツが喜びそうなところに連れてかなきゃ…だめなんだよな。
「いくみ、どこ行きたい？」

「アメリカ！」

「真剣に答える」

「…遊園地！」

「却下」

「動物園！」

「それも却下」

「水族館！」

「同じく却下」

「……………」

…仕方ねえか…

「海、行くか？」

ぱつといくみが目を輝かせる。

「うん！」

「んじゃ、ちょっとママチャリ借りてくる。待つてろ」

俺は家のほうへいったん戻った。

いくみはしゃがんで俺のほうをじっと見ていた。

自転車は古くはなっていたが、パンクもしていないしブレーキも
きく。

車輪が空回りするような音をたてて自転車は進んだ。

いくみはじつと同じところで待っていた。

「ほら、後ろ乗れ」

「届かない」

「努力しろ」

「無理」

仕方ないからいくみを抱き上げて後ろに乗せる。

俺が乗ると腹に手をまわしてきた。

「落ちてもしらねーからな」

「うん。自己責任だよな」

「……………」

思いつきりペダルを踏む。

暑い日差しで出てきた汗が風で冷やされ、身体を冷やす。
十分も走ると風に潮の匂いが混ざってきた。

「わーすごーいひろーい！」

自転車から降ろすといくみははしゃいで走っていく。

「海に落ちんじゃねーぞ」

「はーい」

まあ、とりあえず見晴らしがいいから落ちても分かるけどな。
…海なんて…いつ以来だろ。

目の前を小さな子供が走りぬける。

「お母さん！貝殻！」

『お母さん！美雪姉ちゃんが貝殻くれたよ』

「耳に当ててごらん。」

海の音が聞こえるよ」

『正人、耳にあててみて。』

海の声が聞こえるよ』

「！…ホントだ！」

『すごい！ほんとだ！
お母さん物知り！』

…嘘みたいだな。

俺にも、あんな日々はあつたんだ。

あのガキみたいに、母親に甘えてた日々もあつたんだ。

緋色の記憶

海にいと日差しを強く感じる。

潮のせいかな？

遠くに小さく見えるいくみは飽きずにずっと海の波を見つめている。

…俺は飽きた。

そろそろ帰るか…

「あれ？正人？」

帰ろうと思つて腰を少し上げた瞬間声をかけられた。

振り向くと見慣れた、しかし最近は見えていない顔があつた。

「おいおい。」

オレを忘れた？

健治だよ。伊沢健治」

…そんなこと、言われなくても分かっている…

「覚えてるよ」

「…相変わらずだな」

健治は微笑むと俺の隣へ座つた。

「…お前、学校は？」

「お前が言えんのか？」

不登校の正人くん」

「……………」

嫌なやつ。

「なーんて…」

腕の治療の為に、病院行つた。

今日は学校休んだ」

自分の左腕を軽く小突いて健治は説明した。
つい最近まで、ギプスがついていたはずだ。

「…復帰できそうかな？」

「いや、無理だな。完全復帰は…」

「お前なら、ベスト8ぐらいまでまた上りつめることくらい、できるだろ？」

健治には空手で全国大会三位になるほどの実力が”あつた”。

そう…あつた。

半年前に、交通事故で左腕を複雑骨折をするまでは…

その上、骨の破片が神経を傷つけ、腕としての機能を失うかもしれないと医師に言われた。そう言われながらも、奇跡的な回復を見せたが、それでも元のようににはならなかったようだ。

「駄目なんだよな…八位じゃ…」

「？」

「せめて前と同じ、もしくは前より高い実力になんきや…」

「…そうか…」

俺が次の言葉を言おうとした時に、

「まさとー！貝殻貝殻！」

いくみが走ってきた。

手には拳大の巻貝が握られている。

「何あの子。彼女？小さいな！」

なぜそうなる。

「あ…」

いくみが健治に気づき、足を止める。

健治は右手を上げて「よっ」と短い挨拶をした。

「はじめまして。まさとお友達？」

「ん。いざわけんじ。よろしく」

「よろしく。あたし、いくみ」

「いくみちゃんかー。いい名前だ」

いくみの頭を撫でて健治は笑った。

「けんじくんは優しいね。」

まさとと大違い」

「じゃ、健治の家に行け」

「おいおい…それはちょっと…」

健治が苦笑する。

その間にいくみは俺の前に貝殻をおいてくとまた海の方へ走って行った。

子供好きの健治は楽しそうにいくみを見ていた。

「で、なんなんだ？あの子」

「居候」

「いそうろう？なんだそりゃ？」

「他人の家に世話になり食べさせてもらうこと。また、その人。食客」

辞書に書いてあるとおりのことを言った。

「嫌な奴だな」

「……………」

「そうじゃなくてだな…なんでこのご時世に居候なんか居るんだ？
たしか、おまえんところは両親共々兄弟いねえから従兄弟とかいねえよな？」

「再従兄弟か？」

「住所不明。苗字不明」

「はあ？」

「はあ？はこつちだ。」

「”歩くイカ”とやらを探してるんだとさ」

説明するのが嫌になってくる。

さすがに健治も笑うしかない、という様子。

そしてその笑顔も消え、真剣な表情になった。

「…学校…どうするんだ？」

姉貴から何度も言われている言葉を、今また健治に言われた。

「受験は…」

「…二ヶ月行つてねえんだぜ？」

二ヶ月…もつと長かったような気もするが…

「お前、頭はいいからさ…まだ間に合うかも…」

「無理だね。」

数学や英語はもう未知の領域に入ってるだろ」

「高校の問題も解けるお前が言う言葉とは思えないけど」

いつも、健治に口論で勝ったことはない。

今のが口論と言えるかどうかは、わからないけど。

「教えてやろうか？どこまでやってるか」

「いい」

「数学はアレだ…二次関数…が終わったな…あと…」

「いいって」

「英語が…なんてんだっけ…」 フーム”とか”ホワイ”とか使う

…ああ、関係代名詞」

「いいって言ってるだろ！」

俺が大声を出すと健治は黙った。

驚いた様子もなく、先ほどまでと同じように遠い一点をただ見ていた。

俺も、何も言えなくなる。

そういう時は、決まって健治が口を開く。

「…辛いとは…思っけどさ…」

「……………」

「今耐えれば…そのうちいいことに巡り会えるって」

いいことってなんだよ。

「よくお前…耐えられるよな」

「バカにはなに言ったってわかんねえよ。」

忘れようとするしか、逃げ道ねえだろ？

コンクリに頭ぶつけてでもさ」

最後の言葉を、健治は冗談っぽく言ったが俺は知ってる。

校舎の裏で、悔し涙を流しながら、何度も何度もコンクリートの

壁に頭をぶつけていたことを。

額に血がにじむほど、ぶつけていた。

狂っているように見えたかもしれない。

でも、健治には他の逃げ道がない。

「片腕でも、相手ふつとばすくらいのこと、できるだろ……」

「手を出したら負けだ」

「そうして、”勝った”と自己催眠をかけるのか？」

「……ああ」

健治は微笑んだ。

なぜ健治はそれで耐えられる？

話している間にも、”あの頃”のことが思い出される。

同級生に言われた言葉。

親や教師に言われた言葉。

だれも、なにも、しらないくせに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7778a/>

僕らはねじれの位置にいた

2011年10月3日11時18分発行